

3 | B14-4

紅参末（正官庄）は血糖コントロールを改善し得るか — 2年間のfollow up study —

明生病院・内科¹⁾，東海大学・医学部・分子生命科学²⁾，関西医科大学・第一内科³⁾

○鉄谷多美子¹⁾，山村雅一²⁾，山口多慶子³⁾

【目的】糖尿病治療は，血管合併症を早期に診断，その進行を防止し社会復帰する事である。このために血糖コントロールは必須条件の1つである。紅参末・正官庄（RG-1）の多彩な作用に着目し，血糖コントロールについて検討した。

【対象】Type IIならびに，インスリン依存期にある Type II 糖尿病76例である。

【方法】76例を RG-1 群（43例）と，紅参末・非与薬 [RG-0群（33例）] の2群に分けた。さらに RG-1 群を 3～4.5g/日，経口与薬（RG-1 3～4.5g/日群）した34例と，一方，膵予備機能 [Urin-Conecting peptide immunoreactivity (U-CPR)] が低下（30ng/ml以下）している症例に，RG-1 6g/日に増量（RG-1 6g/日 増量群 9例）した。

【症例の背景因子】RG-1，RG-0 両群間の年齢構成は，平均64歳と差異を認めず，糖尿病の罹病期間は，RG-1 6g/日増量群は平均21年と明らかに長期であった。観察期間は1997. 12～1999. 12までの24カ月，血糖コントロールの判定は，随時尿を用いた U-CPR（月1～2回），HbA_{1c}（月1回）を用いた。

【成績】1. U-CPRの経時的推移：RG-1 3～4.5g/日群は RG-0 群に対して，24カ月後に至る全ての時点で，有意に高値（正常内）で経過した。6g/日増量群は，増量前値25.4±12.5ng/mlから10カ月後，55.1±22.3ng/mlと明らかに増量（ $p<0.005$ ）した。

2. HbA_{1c}の統計処理：RG-1群は，与薬後1，2，3カ月間の積算値に対し，15，18，21，24カ月後では6g/日増量群（ $p<0.01$ ）ならびに，3～4.5g/日群（ $p<0.05$ ）のいずれの群も，HbA_{1c}の改善は有意であった。一方，RG-0群とくらべると RG-1 6g/日増量群では，1，2，3カ月間の積算値のみが有意（ $p<0.05$ ）であった。またRG-1 3～4.5g/日群は，1，2，3カ月（ $p<0.0005$ ），6，9，12カ月（ $p<0.05$ ）さらに，15，18，21，24カ月（ $p<0.00001$ ）の積算値に対し，HbA_{1c}の低下は有意であった。

【考按ならびに結論】RG-1 群は低値であった U-CPR を正常内に改善（増量）し，しかもこの値を2年間も維持し得たこと，またHbA_{1c}も改善し得た事から，RG-1は血糖コントロールに有用で，有効な和漢薬である。しかし U-CPR は日内変動が大（変動係数 約30%）であることなど，いくつかの問題点もあり，今後クレアチニン補正による検討が必要である。また BMI（kg/m²），膵内分泌機能（空腹時 IRI，CPR），中性脂肪，遊離脂肪酸などを指標とした検討が必要と考えられた。